

<b>Title</b>	プラネタリー・ジェントリフィケーション：それは何であり、何が問題なのか
<b>Author</b>	シン, ヒュンバン / 荒又, 美陽[訳] / 仙波, 希望[訳]
<b>Citation</b>	空間・社会・地理思想. 22 巻, p.127-137.
<b>Issue Date</b>	2019
<b>ISSN</b>	1342-3282
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
<b>Description</b>	
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20190401-007

Placed on: Osaka City University

# プラネタリー・ジェントリフィケーション ——それは何であり、何が問題なのか——

シン・ヒュンバン\*  
(荒又 美陽\*\*, 仙波 希望\*\*\* 訳) (訳注1)

Hyun Bang SHIN

Planetary Gentrification: What It Is and Why It Matters

プラネタリー・ジェントリフィケーションについての私の研究を披露する機会をいただくことになり、荒又美陽先生からのお招きに本当に感謝しています。普段私は、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの地理環境学部を拠点としています。主にアジアにおける都市化のポリティカル・エコノミーの問題について研究してきました。実証研究の主要なフィールドとしては、ソウル、北京、広州、また最近ではベトナムのハノイやホーチミン・シティ、エクアドルのキトなどがあげられます。私の研究が焦点をあててきたのは主に、場所はいかにして、デベロッパーのジャーゴンで言ういわゆる「より高度でより良い利用」へと変貌するのか、それを可能にするものは何か、そしてそこからどのような社会的空間的影響が生まれるのかといった事柄です。これらの問いはジェントリフィケーションというテーマにつながりを持ち、そのため私は、博士課程時代からこのテーマを追い続けています。また同様に北京やソウルといった都市の劇的な変容に影響を与えたオリンピックのようなメガイベントについても研究してきました。

今日の報告は主に、2016年に研究仲間であるロレッタ・リーズ(レスター大学)とエルネスト・ロペス=モラレス(チリ大学)との共著で刊行した、『プラネタリー・ジェントリフィケーション』に基づいています。本日のお話は三つのパートに分かれます。最初に、どのようにこのプロジェクトが現れたのかについて、簡単に説明しましょう。プロジェクトの成り立ちのようなものについてお話しすることで、この本が出る前に何があったのか、そしてこの本が研究仲間と私のこれまでの仕事のいかなる延長線のうえに位置づけられるのかを示したいとおもいます。次に、ジェントリフィケーションについて全世界でなされている議論に、この本がいかなる貢

献をしているのかをお話しすることで、この本が言わんとするところをまとめてみましょう。そして最後に、私の最近の研究に話を広げ、とりわけ非西洋的な文脈に沿ってこのジェントリフィケーションというテーマをとりあげるとき、この研究が何を意味するのかを示したいとおもいます。

さて、地球規模で起こる、複数のジェントリフィケーションを研究対象とするとき、私たちには、相関的な視点が必要になります。つまり、非西洋の場所において、様々な地域の特殊性から把握しうる実際のジェントリフィケーションの形式や性質に関する事柄を、文脈にそって理解することが求められるのです。これは私の研究人生を通じて取り組んできたことでもあります。若いころ、私の実証研究は、主にソウルや北京の荒廃した地区の都市再開発やジェントリフィケーションの問題を、都市的な不正義や立ち退きという問題と関連づけて考えていました。立ち退きについては、後で時間があればもう少しお話しすることにして、ここでは次のようにだけ述べておきます。立ち退き、つまりジェントリフィケーション研究の核心部をなすそれは、最後までその場所に残る、直接的で物理的な立ち退きに限定できるものではありません。コロンビア大学のピーター・マルクーゼが、連続立ち退き、立ち退き圧力や、排除的な立ち退きといった言葉で説明しようとしたように、立ち退きはより広い範囲で認識することができるものです。ローランド・アトキンソンが象徴的立ち退きという議論において強調しようとしたことや、マーク・デイヴィッドソンやロレッタ・リーズが現象学的立ち退きとして言及していることもここに含まれます。これらの議論に共通するのは、たとえそこにひとが居続けることができたとしても、立ち退きを経験していないことにはならない、という含意です。同時に、立ち退き自体がいかに広範囲で

\* ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (H.B.SHIN@LSE.AC.UK)

\*\* 明治大学

\*\*\* 東京外国語大学・院

長期的なプロセスであるかを理解することも重要でしょう—実際、いつが立ち退きの始まりで、またいつが最終的に終わりであるのかを見極めるのは、ときに困難が生じます。ここにあげたすべての点が大変興味深い議論になりえますし、それを通じてジェントリフィケーションの過程をもう少し批判的に理解することもできます。これらは私の今日の報告における主なポイントにはなりません、今日の議論の一部として、立ち退きやジェントリフィケーションを考えるなら思い起こしておくべきことであると言えるでしょう。

では、この本が刊行された経緯に話を進めましょう。最終的に『プラネタリー・ジェントリフィケーション』として書かれたものの直接的なきっかけは、私たち共著者が都市研究財団から助成を受けた2011年にさかのぼります。都市研究財団は都市研究セミナーシリーズを支援してくれていて、それにより特にアジアやラテンアメリカからの研究者を集めることができています。都市研究財団の資金で2012年の3月・4月に、私たちは二つのワークショップを、一回はロンドン、もう一回はチリのサンティアゴでそれぞれ行い、グローバルなジェントリフィケーションについて考えを深めていきました。アジアやラテンアメリカにおいて実証的でオリジナルな研究をしている人たちからさまざまな話を聞くことができ、私たちにとってきわめて興味深い経験でした。

ワークショップをとおして私たちは次のような問いをもっていました。ジェントリフィケーションにまつわる複合的かつ地理的な不確定要素とは何なのか。グローバル・ノースの外側にある都市において、インナーシティや周辺部で経験されている都市リストラクチャリングの過程を議論するのに、ジェントリフィケーションという概念は本当にふさわしいのだろうか。それから、概念としてのジェントリフィケーションは、他の概念ではできない分析における何をなしているのか。そして、ジェントリフィケーション以外の概念によってよりよく把握される内在的なプロセスは存在するのだろうか。これらが、私たちが聴衆や私たち自身に投げかけようとしていた初発の問いでした。そしてまず、発表された研究を、いくつか依頼して書いてもらったものと合わせて、共編の『グローバル・ジェントリフィケーションズ——不平等な開発と立ち退き』という本としてPolicy Press社から公刊しました。ここで、おそらくは本のタイトルがジェントリフィケーションの複数形 (gentrification's) の表現であることに気付かれたことでしょう。

今日の報告で強調したいポイントの一つは、ジェントリフィケーションを大文字の'G'entification、つまり一つのジェントリフィケーションのモデルが何らかの形で輸出されたり輸入されたりすることを意味するのではなく、それを複数形で考える必要があるということです。そうすることにより、より地域の内側にそったやりかたでジェントリフィケーションの発生を議論するときの、地域的な経緯、地域に適用可能な社会空間的關係が映し出されてくるのです。ジェントリフィケーションを経験する形態や行程はそれぞれの場所によって異なっており、それゆえに、複数形の小文字のジェントリフィケーションgentrification'sは、私たちが結論としてもったものでした。

アジアでの経験を議論するためにロンドンで発表された研究の多くが、2016年の*Urban Studies*誌の特集号にまとめられました。タイトルは「ジェントリフィケーションをグローバル・イーストに位置づける」。その特集号では、相対的に強力な国家によって牽引された、東アジアにおける凝縮された都市化と経済成長の経験や、地域の民主主義の発展を傷つける抑圧された市民社会のような、ある共有された類似性をもった文脈においてジェントリフィケーションを理解しようとしていました。特集号のための問いは、そのようなナショナルな文脈が都市開発の特殊な行程の形成にどのようにつながるのか、ひるがえって今度はアジアに内在的なかたちとして、ジェントリフィケーションが生じる文脈をどのようなかたちで提示しているのか、といったものでした。また、別の特集号が*Urban Geography*誌で公刊され、そこではサンティアゴで発表された研究がまとめられ、ラテンアメリカのジェントリフィケーションの経験を議論しています。

これに加え、私は韓国のジェントリフィケーションを位置づけるために二つの試みを行っています。韓国語で発表しました。一つは『空間と環境』誌の特集号で、反ジェントリフィケーション闘争の問題を検討し、開発的アーバニズムという韓国の文脈にジェントリフィケーションを位置づけました。もう一つは、Dongnyok社から刊行された『反ジェントリフィケーション——何がなされなければならないか』と題する編著です。この中で私は、活動家、学者、市民社会のその他の人々を集めて、ジェントリフィケーションと戦わないしはそれを抑制するために、私たちがどのように、何ができるのかを考えようとしていました。

これまでのお話が、今日の私の報告が構成され

た背景であり基盤です。おそらく有効な出発点は、ジェントリフィケーションの報告においてその名前を無視することのできない、ルース・グラスでしょう。彼女はジェントリフィケーションを最初に概念化した人です。そう、ジェントリフィケーション研究にあまりなじみのない方々は興味深く思われるかもしれませんが、ジェントリフィケーションはおそらく、その起源を特定の出版物に正確にたどることができる、非常にまれな学術的コンセプトの一つなのです。それが1964年に刊行されたルース・グラスのテキストにあたります。ですから、Googleで調べたり、Google Books Ngram Viewerなどを使ってみると、1964年が出発点であり、それ以降ジェントリフィケーションに言及する出版物の数が急速に増えていることがわかるでしょう。

ルース・グラスもまた、先進国と同様に、途上国の都市化について思考を巡らしています。彼女の仕事の一つに、インドを訪問し、他の都市の専門家たちと議論するというものがありました。1964年にすでに、彼女は今日ポストコロニアルの都市研究者の中でよく聞くようなことを議論しています。特に彼女の文章が、西洋の都市の経験を基礎におく都市理論の限界に言及していることにも気づきます。彼女はこう言っています。

国際的な規模で進展する都市化の諸潮流やその含意に関する精巧な理論や思索は、都市化の様相を確認するための最も初歩的な一次資料さえ皆無であることを認めざるをえないとき、一体どうなるのだろうか<sup>1)</sup>。

彼女はシンプルにここで認めているのです。途上国において起きていることやそういった場所での都市化についての理解が非常に遅れており、それゆえ、私たちの理解や都市理論を豊かにするために、特に先進国ではない地域を対象にして、知識の生産における不均衡に本当に取り組む必要があるという事実を。

これはまた、非西洋の国々における多様な幅を持った経験を収集しようとしたときに、研究仲間との間における私の議論の主な出発点でもありました。ジェントリフィケーションに関する20世紀終わりごろの議論は、ロンドンやニューヨーク、時にアムステルダムのような、西洋の主要都市を主な基盤としていました。つまり、ジェントリフィケーションの議論は主に西洋、西ヨーロッパか北アメリカという「いつもの問いの対象」の経験をもとになされて

いたのです。私たちはこの研究における不足に意識的であり、ジェントリフィケーションがグローバルなスケールでどのように内破するかについての全体像をよりよくつかむべく、なかでも非西洋都市、つまり「いつもは問われていない対象」の経験を収集する必要性に駆られていました。

ルース・グラスは次のように強調してもいます。

発展途上国における都市化の現在の過程、輪郭、そして含意に関する我々の認識は、いくつかの相互に関連した点で限界があり、あきらかに停滞してさえもいる。第一に、(他の多くの領域と同様に)この領域の分析と調査の枠組みは西洋、とりわけアングロ・サクソンの経験に強く条件づけられている<sup>2)</sup>。

ジェントリフィケーションを概念化した者から発せられたこの言葉を耳にするのは極めて興味深いことです。これらは、都市理論の西洋での生産に立ち向かおうとするポストコロニアルな都市理論家によってよく繰り返され、また強調されてきた類の発言です。ルース・グラスの発言は有益な基盤を私たちにもたらしてくれます。その基盤のうえで様々な学問の諸伝統に連なる都市研究者がともに、より開かれたやり方でジェントリフィケーションを論じることができるのです。

私たちの『プラネタリー・ジェントリフィケーション』は、ジェントリフィケーション研究からアングロ・サクソンのヘゲモニーを解き放つための試みです。共編著『グローバル・ジェントリフィケーションズ』、*Urban Studies*誌そして*Urban Geography*誌の特集号を共同編集した後、私たち三人はともに一つのモノグラフに取り組みはじめました。編著『グローバル・ジェントリフィケーションズ』はリードゲストエディターであるロレッタ・リーズによって音頭がとられました。その間、私は*Urban Studies*誌の特集号のゲストエディターを務め、エルネスト・ロペス＝モラレスは*Urban Geography*誌のゲストエディターを務めていました。だからこそ、ある意味で私たちは仕事を非常にうまく分担することができていたのです。それから私たちは次のように考えました。これまで私たちは、多くの時間を費やし様々な事例検討やこの研究領域のレビューを手がけてきた。いまようやく、ともに一つのモノグラフを書き上げ、ジェントリフィケーションが私たちに、そしてより広く都市研究に対して意味するところについて、一つの宣言を行うときがきたのではないかと。

これがこの本が生み出されることになったいきさつです。このモノグラフで私たちが試みたのは、ジェントリフィケーション理論の概念的な射程を考察することであり、グローバル・ジェントリフィケーションズの考え方、つまりグローバルに進行するジェントリフィケーションの考え方を問いながら、この理論がいかに非アングロ・サクソンの伝統に反して実際に解釈され得るのかを考えるというものでした。

「グローバルに進行するジェントリフィケーション」という表現は2000年代初頭に非常によく知られるようになりました。ニール・スミス自身が、*Antipode*誌に掲載された2002年の論文で、いかにジェントリフィケーションがグローバルな都市戦略としてみなされ得るのかについて論じています。ローランド・アトキンソンやゲイリー・ブリッジも2005年に編著を刊行しました。この本はグローバルな都市植民戦略としてのジェントリフィケーションについて書かれ、そこではジェントリフィケーションは西洋から世界のその他地域に至る政策の伝播の一部であると述べています。つまりジェントリフィケーションは、西洋の諸都市にて生まれたテンプレートを用いながら、他の場所へと輸出されているということです。しかし、私たちは以下のように問い返します。これが話のすべてなのだろうか。それは輸出された都市政策を検討した際に私たちが考えることができる唯一の物語であるのか。本当に中心から周辺へと輸出されているだけなのか。

もちろんこうした問いをもった私たちに課されるのは、世界の様々な箇所で行進中の事態に対するさらなる理解です。ここではある意味で、自分たちのフィールドにおける専門的知識が役立ちました。エルネスト・ロベス=モラレスがラテンアメリカの都市化とジェントリフィケーションの経験を研究してきた一方で、私はアジアの都市化とジェントリフィケーションを研究してきました。もちろん、ロレッタ・リーズは北アメリカおよび西ヨーロッパの経験を研究してきています。こうした研究の蓄積によって私たちは、三人の間でのさらなる比較に基づく対話のチャンスを手にしていました。そして、この対話は著書の議論にも同様にその成果として反映されています。私たちは植民地主義的な知の産出を避けようとし、同時に平等な私たちでの共同研究を目指しました——これが、私たちのこだわったところです。幸運なことに、すべての仕事を一緒に刊行したあとでさえ、私たちは未だに友人、研究仲間であり続けています。だからこそ今回の私たちのケースにおいて共同研究が本当にうまくいったのだと思っ

ています。

ジェントリフィケーションの概念的な射程範囲について思考を巡らせるとき、重要なのはまず、この概念を歴史的に制約された——主に1960年代のロンドンと関連した——文化的プロセスとして扱わないことです。近年見かける批判の一部は、いかにしてジェントリフィケーションがイギリス以外の現代都市には適用できないかといったものです。そこではジェントリフィケーションが1960年代ロンドンのローカルな歴史を反映したものとして考えられています。ルース・グラスが観察したのは、北ロンドン、イズリントン区の労働者階級居住地域において進展する変化でした。その変化が伴うのは、住み替えに次ぐ住み替えによる地価の上昇です。ルース・グラスにとってジェントリフィケーションとは、最終的に労働者階級の居住者を近隣から追い払い、中産階級の居住者が彼らに取って代わるような、不可逆的となった近隣スケールの過程を表していました。非西洋の文脈にジェントリフィケーションを用いることに懐疑的な昨今の批判者たちは、ルース・グラスのオリジナルな研究がなされた時代におけるロンドンの都市変容の経験とジェントリフィケーションを結びつけることが、はたして本当に必要なのかとよく問うものです。

しかし、思うにそうした批判こそがジェントリフィケーションを「化石化する」試みではないでしょうか。そしてそれは、ジェントリフィケーションあるいは他の都市プロセスがかつての安全地帯の外側で理解され、再生産される事態に対して、極めて視野狭窄な考え方ではないかと思うのです。この場合、ジェントリフィケーションは、1960年代における北ロンドンの都市の文脈のみに関連するものとなり、また、近隣地区の変化に関する特定の類型のみに関するものとなる。こうした理解が20世紀後半をとおした、ジェントリフィケーションにまつわる論争全体を蝕んできたのです。ここでの議論には、ロンドンに加えて、バンクーバー、ニューヨーク、あるいはアムステルダムにおけるジェントリフィケーションの経験といったものが含まれています。しかし、もしジェントリフィケーションを1960年代におけるロンドンに結びつけた文化的な経験のみに結びつけるのであれば、ジェントリフィケーションという論争も存在しないことになってしまうのでしょうか。

グローバルなジェントリフィケーションを研究するということは、単にグローバル・サウスから出発することでもなければ、ジェントリフィケーション



研究で問われてはこなかった非西洋という対象を精査すべく、望遠鏡の向きを変えることでもありません。ジェントリフィケーション研究のコレクションにさらなる未検討対象たる非西洋の豊富なケーススタディを追加して、資本と関連するジェントリフィケーションがあらゆる場所で再生産されるか、されないかを理解しようとすることでもありません。同様に、これまで検討されてきた西洋という対象を無視することでもありません。西洋以外の都市、つまり旧来の研究の「安全地帯」の外にある都市に注意を向ける一方で、私たちはそうして検討されてきた都市でのジェントリフィケーションがどのように修正され、発展を促され、異議を唱えられているのかを理解する必要があります。同様に西洋の都市における不平等も考えていくことが必要なのです。さらには、伝統的な比較都市研究、特に「普通の都市」として都市を考察することの重要性について論じ続けているジェニファー・ロビンソンの研究などに依拠しながら、すべての都市を分析的な水準に位置づけていく必要もあります。都市を理解するためのレンズとしての、鍵となるパラダイムを提示する都市など存在しないのです。

対象が明確であるにせよ、そうではないにせよ、この本ではジェントリフィケーションという理論を議論することを試みました。つまりそれはジェントリフィケーションの拡大に影響を与えるような地理学的な諸条件の内因的、外因的な性質を考察するということです。特に、ローカルに用いることが可能な特殊性、そして社会空間的な関係を考察する際、変動を説明するところの普遍的な可能性もあれば、それだけでなく偶発的な要因もあります。その可能性や要因は、地理をめぐっての国民国家内のアクターだけでなく、国家を超えたプレイヤーが関与するマルチスケールな闘争に曝されてもいます。ここできわめて重要なのは、ジェントリフィケーションに関して開かれながらも埋め込まれている、関係的な理解をするということであり、同様に私たちは、ドリーン・マッシーがかつて主張したような、空間に関して開かれつつも埋め込まれた関係的な理解を有しているということでもあります。1993年の刊行物(p. 145)で、マッシーは以下のように強調していました。

[すべての場所の] 独立性と [個々の場所の] 独自性は、同じコインの両面として理解されうる。そのコインには二つの基本的な地理的概念——不均等発展と場所のアイデンティティ——が互いの緊

張関係の内に含まれ得るし、それぞれ他方の概念の説明に貢献することができる<sup>3)</sup>。

地理学者にとって、空間をめぐるこの関係の視角が、ジェントリフィケーションだけでなく、たとえばメガイベントの影響を同様に含む、他の都市過程を理解することにとって非常に有益な出発点となると私は考えます。

『プラネタリー・ジェントリフィケーション』では、ジェントリフィケーションが至る場所に再生産されるという単一かつ普遍的なプロセスという見立てから距離を置こうとしました。もちろんこれこそが私たちが批判的立場をとる対象であるためです。私たちにとって、有機的なジェントリフィケーションとは、単純に西洋におけるジェントリフィケーションのコピーとしてみなされるものではありません。だからこそ、特に西洋から東洋へ、あるいはグローバル・ノースからグローバル・サウスへと概念を翻訳することを問題視しているのです。最近まで、ジェントリフィケーションが非西洋の都市またはグローバル・サウスに存在するかどうかを立証しようと試みるような、専門誌に投稿された論文を見かけることがあります。思うに、そのような研究は極めて窮屈なものであり、グローバル規模で進展する複数のジェントリフィケーションや、一般的な都市プロセスのための議論の進展に、それほど有益なものとはなりません。

プラネタリー・ジェントリフィケーションでは、一面で、西洋の影響下の有無に関わらず独自のかたちでジェントリフィケーションが発生することが認められています。もう一面で、それは方法としてのジェントリフィケーションについて考えることでもあります。言い換えれば、ジェントリフィケーションという概念は、ジェントリフィケーションそのものの存在を確証することを必ずしも伴わなくてもいいような、都市過程をよりよく理解する方法として用いられるのです。ここで『プラネタリー・ジェントリフィケーション』の14ページに載っている表について言及しましょう<sup>(訳註2)</sup>。この表が示すのは、都市と都市過程についての私たちの理解が、いかにしてこれまでのジェントリフィケーション研究にかつて存在していたより因習的な理解から区別されるのかということです。ジェントリフィケーションの伝統的な比較では、都市は境界づけられた全体としてみなされ、そして所与のものとして扱われます。近隣区域も境界づけられたものとして扱われますが、その一方でそのスケールは都市のスケールと

直接関連をもっています。これらすべての思考の筋道は避けられねばなりません。私たちは都市を境界づけられていない区域としてみなし、フローとネットワークを含みながら、他の場所との関係性を通して構成されたものとして理解します。だから、関係的な方法で、特に都市のなかにたった一つの中心があるのだと考えるのではなく、都市が進化するにつれて生じる多様な中心を考えながら、私たちは都市とその中心性の複数性と多様性を強調するのです。近隣区域、都市、地域のおよびグローバルなスケールはスケール横断的であり政治的です。このことは様々な地理学的スケールを時代遅れにするような開かれた過程を常に考えるように私たちを後押しします。都市間の類似性と相違が、理論を立て直し、手元の理論を変えていくのです。これらがプラネタリー・ジェントリフィケーションを考える際に私たちが主張しようとした視角となります。

プラネタリー・ジェントリフィケーションは、プラネタリー・アーバニゼーションに関する現存の、そして生じつつある研究に依っています。ここで私たちはさらにアンリ・ルフェブルに、そしてある程度、プラネタリー・アーバニゼーションに関するアンディ・メリフィールドの議論に言及することとしましょう。検討を行ってきたのは、どのように、いわゆる資本蓄積の第二循環、特に建造環境が、現代社会において投資の主なあて先になっているのか、そしてどのように都市の危機は西洋のポスト工業化社会において乗り越えられねばならないのか、といったものでした。ルフェブルはどのように資本投資が第二次セクターで起こるのかを特定しようとしました。つまり、特に不動産に流れ込む資本のフローがどのように蓄積の危機を処理するための一時的な尺度となるのか。しかし、時間を超えて、不動産のなかに価値を把握する誘惑的な性質のために永続化してしまうのか。このような議論の筋道は、プラネタリー・ジェントリフィケーションの私たちの理解にとっての主な基盤になっています。それは大きくみれば不動産における第二次セクターが、世界中の現代的な都市で変化をつくりだすための、誘惑的な大きな方法となっており、地球的な規模で徐々に影響力を持っているためです。そのような不動産に関する第二次セクターの増大は、さらに金融化や政策の伝播によってさらに手助けされるし、急速に工業化およびポスト工業化する社会両方において都市政策のツールとして不動産を用いるような、より内在的なプロセスによっても同様に手助けされるのです。

お話ししたように、私たちはアンディ・メリフィールドによるプラネタリー・アーバニゼーションの議論に依拠しています。彼は「公共と私有、国家と経済、そして政治とテクノクラシーといったような古い区分を無くす必要があるように、グローバル・ノースとグローバル・サウス、先進国と低開発国、都市と農村、都市と地域、都市と郊外といったお決まりの区分を無くすこと」を呼びかけたのでした<sup>4)</sup>。ある意味、彼の議論もまた、もはやお決まりの区分では概念化されえない、ジェントリフィケーションについて考えるための興味深い手がかりを提供しているといえます。というのも、こうした従来の区分を用いることで、都市中心部における都市化過程か都市の拡張のみにジェントリフィケーションが限定されてしまうきらいがあるからです。ジェントリフィケーションに対し、ただ一つの中心性を想起させるこうした用法からは距離を置かねばなりません。

したがって、プラネタリー・アーバニゼーションとは資本蓄積の第二次循環、特に世界の主要都市において大きな現象となっている——これはグローバル経済の中でその都市がどのような位置を占めているかに関わらずみられる——投機的不動産の優勢という事実象徴される都市化社会を考えることに他なりません。不動産セクターの台頭は、工業生産を建造環境へ従属させることも伴います。言い換えれば、プラネタリー・ジェントリフィケーションは以下のような思考を求めます。それは、工業生産としての工業化、そして建造環境の再編成としての都市化という二つのプロセスのあいだで織りなす相互作用が、いかにして現代の都市化を理解するための主要な柱となったのかを考えることに他なりません。デヴィッド・ハーヴェイによる資本蓄積のさまざまな循環についての議論は、非常に役に立ちます。建造環境の第二次循環、すなわち資本の都市化に対する工業生産の従属は、生産拠点を他の発展途上国へ大部分移転した脱工業化都市だけでなく、急速に工業化しつつある国家においてもかなり影響を及ぼしています。また今日では、工業化しつつある国家における主要都市は、不動産投機の影響を受けているだけでなく、中流階級や上流階級特有の行動に起因する憧憬的アーバニズムの影響も受けているのです。

不動産の第二次セクターの台頭は、世界中でさまざまな形で現れています。現存する農村地域を都市地域へと変容させることを試み、農村地域を商品化された都市空間へと変容させることで、現地住民を追い出そうとする、政府や企業による多くの試みを

目の当たりにします。ロンドンのように、公営住宅団地はますます民営化や商品化、収用の対象となり、より商業化された豪華な住宅団地へと変貌しています。資本蓄積のための不動産プロジェクトへと変わる、スラム再開発プロジェクトもあります。グローバル・サウスにおけるスラムは、伝統的に資本主義的蓄積の立ち入り禁止区域であると見なされていました。しかしこうしたスラムもまた、スラム居住者の権利を剥奪しようとする、大規模な解体と再開発の対象となりつつあります。これらの事実は、都市にまつわる様々な権利が処分の対象となる方法を突き止めようとした、所有権剥奪による蓄積についてのデヴィッド・ハーヴェイの議論を思い起こさせます。

よってプラネタリー・ジェントリフィケーションにおいては、二つの大きな探究の柱があります。一つは不動産やインフラを含む建造環境への生産的投資についてです。それは集積の第一次循環として工業生産を支援するものですが、都市空間の再構成に対し不均衡な影響を与えるものです。もう一つは、空間と地代抽出の商品化についてです。つまり地価の上昇を捉えることであり、それが都市変容に大きな影響を与える要因です。これら二つの柱、いわば建造環境への生産的投資と空間と地代抽出の商品化は、現代の都市化する世界の中で一体となり、都市居住者と農村住民の所有権剥奪を生み出しています。プラネタリー・ジェントリフィケーションは、こうした所有権剥奪の文脈の中に組み込まれています。つまり、プラネタリー・ジェントリフィケーションの議論は、まさにプラネタリーなスケールで生じる剥奪のより大きな枠組みの中で、ジェントリフィケーションを見つけ出そうとするものなのです。

先ほど私は、ジェントリフィケーションは単純にグローバル・ノースからグローバル・サウスへ、あるいは西洋から東洋へ輸出されると考えることはできないと言いました。そこで伝えたかったのは、この建造環境の第二次循環の上昇過程が、経済の資本主義的発展の進行において、どの程度より内在的な過程であったかを考えることが重要であるということです。確かに、都市や国家は、国際的な資本による搾取にますますさらされています。これには、世界的な年金基金が都市変容や投機の主要な担い手であることが含まれます。しかし同時に、多国籍資本にすべての原因を帰責することはできません。内在的なプレイヤーについても考える必要があります。内在的な建築者、開発者、地方自治体、または中央政府。それぞれが独自の方法で、都市投機の搾

取的プロセスを最大限に活用しようとしています。これらの内在的なプレイヤー全員が、都市空間を再構成し、資産をますます高度かつ有効に利用しようとする機運を醸成することによって、ジェントリフィケーションが生じるのです。したがって私たちは以下のように考える必要があるのです。どのようにしてトランスナショナルな都市化のプロセスに、都市がますますさらされるようになったのか。どうしてそうしたトランスナショナルな影響が、都市の中に存在するすべてを上書きしようとししないのか。どのようにしてトランスナショナルな影響が、ローカルな場所の中にあるより内在的なものと融合しようとしているのか。

私たちの議論において強調されたことの一つは、国家の役割を——特にありとあらゆる世界の都市プロセスを考える際には——認める必要があるということです。都市化とジェントリフィケーションの西洋でのプロセスの議論では、トランスナショナルな資本やエリートにより多くの注意が払われる一方で、国家の問題が省略されることがよくあります。特に本書で扱った国家に関する議論において、新自由主義化のプロセスは、私たちにグローバル化と新自由主義化した現代世界における国家の重要性を認識させてくれました。国家が都市のリストラクチャリングに積極的に関与するようになるにつれて、ジェントリフィケーションと所有権剥奪の促進もまた、国家により強く推進されるようになりました。

国家の役割は、東アジアまたはグローバル・イーストでより明白になります<sup>9)</sup>。東アジアの都市化を見るにつけ、国家は社会と経済の中で常に大きな存在感を示してきました。そしてある程度は、この種の実践は、他の東南アジアの急速に都市化する社会でも繰り返されています。この点に関して、私たちが共同研究を行っている間に発見した興味深いものの一つは、世界中のジェントリフィケーションプロセスにおいて、国家がその存在感を発揮する方法には、一定の収束性があるように見える、ということです。国家による凝集的な工業化と都市化の推進、および国家主導によるジェントリフィケーションの推進に関するアジア諸国の存在感の強さは、脱工業化した西洋社会における国家の役割再配置によって生じました。1980年代から1990年代の撤退期の後の新自由主義期においては、国家が重要な介入主義的役割を果たすことを求められるようになったのです。

ジェントリフィケーションはしばしば国家によって自然化されます。世界中の多くの都市では、貧困



層は国家やその国のエリート集団によってスティグマ化され、都市荒廃の主要因として名指しされています。言い換えれば、貧しい地域は、スティグマ化された貧しい住民の病的行動の影響を受けているから、貧しいままなのだと言われるのです。これは、どのような都市のエリートたちからも話される、一般的なストーリーです。『プラネタリー・ジェントリフィケーション』は、こうした見立てにノーを突きつけます。富裕層と同様に、政治的エリートとビジネスエリートもまた、こうしたスティグマとともに生産しています。貧困地域を再開発し、再生する多くの都市政策が提唱されていますが、そうした政策はたとえ標的とする地域の適切な調査に基づいていないとしても、その場所は荒廃しているか、またはリノベーションを必要としているという、レトリックか仮定によって推進されるのです。多くの場合、貧困地域の物的状況は都市の平均的な生活状況と比較して議論されますが、それはそうした場所にて提供される社会的機能の豊富さを認めないものです。既存の居住者の声を考慮するのではなく、優先されるのは中流階級または上流階級の憧憬的アーバニズムであり、これが再開発の後に到来するとされる青写真なのです。投資が都市の再活性化に必要な条件であるという過度に一般化された仮定が、都市再開発を始めるための重要な制度的メカニズムとなる官民連携のありがちなやり口を生み出すわけです。なお、ここでの民間とは主に民間企業を指し、必ずしもコミュニティ組織自体を指すわけではありません。財的資源が不足している貧困層は、このパートナーシップから体系的に除外されています。

比較ジェントリフィケーション研究の認識論から始めた今日のお話ですが、最後にジェントリフィケーション研究に関するポジショナリティの問題について話すことで終えたいと思います。先に簡単に述べたように、多元的なパースペクティブからのジェントリフィケーション、つまり複数形の小文字のジェントリフィケーション *gentrification's* とは、いかにしてジェントリフィケーションのプロセスが地理を超える形で変化するかを同定することです。私たちは、ジェントリフィケーションとは立ち退きを伴った都市空間の階級的再形成であるという一般的な定義を保持しようとしていますが、このプロセスはさまざまな場所に存在する偶発的要因を反映するように、地理を越え異なる形で変異し、現れるものなのです。

不動産資本の活発な循環と起業家的な都市政策を通じた、政治と経済のより根本的な変化をどのよう

にしてジェントリフィケーション研究が反映させられるのかを意識することも重要です。こうした政策は、資本蓄積と社会的支配のために都市空間を商品に変えることを積極的に試みています。すなわちここでは、国内外のエリートによって支配されつつある、世界中の人々の幅広い所有権剥奪を生み出す外因性と内因性の両方のプロセスを特定することが求められます。だからこそ、ジェントリフィケーションをめぐるプラネタリーな思考が重要なのです。米国と西欧の都市は、グローバル・サウスのジェントリフィケーションのダイナミクスから何を学ぶことができるのでしょうか。強調されるべきは西洋のコピーではない、その地から生まれた複数のジェントリフィケーションが生まれているという事実であり、この事実が西洋から東洋への、あるいはグローバル・ノースからグローバル・サウスへの翻訳された物語以上のものの存在を示しているのです。

すでに述べたように、方法としてのジェントリフィケーションを考えることも同様に意味があります。ジェントリフィケーションは、立ち退きの圧力下で近隣地域に影響を与える具体的な都市プロセスとして理解されていますが、都市プロセスの分析を実行するための有用な方法とみなすこともできるからです。特に、一般性と特殊性の弁証法について考える際には、地理を越えた変容として、どのようにしてジェントリフィケーションを一般的に定義することができるか、そしてどのようにしてジェントリフィケーションが地域の状況と経験を反映しているのか、この双方の間の緊張関係に注意を払う必要があります。そのために、一般的な原因をも捉える形で、場所の独自性を分析することも当然必要となります。言い換えれば、内生的に現れる様々な形態のジェントリフィケーションを理解するために、偶発的な要因を理解する必要があります。しかしそれは、私達がより一般化されたジェントリフィケーションの理解——特に建造環境の第二次循環の搾取的な蓄積プロセスによって構築された都市空間の階級的再形成といったような理解——を過度に抽象化したものとして拒絶することを意味するのでは、必ずしもありません。それこそが、都市化なのです。資本の投機的都市化は、世界中の多くの都市で主要な都市問題となっており、そのようなプロセスは資本主義自体に埋め込まれています。これが、私たちがジェントリフィケーションの世界的変容を研究する文脈なのです。

一般性と特殊性とのあいだの緊張関係は、連携して作用する都市のプロセスの多元的な可能性や結合

を理解し、認識するのに重要であることも示唆しています。これは都市の探求が観察下で単一のプロセスに限定されないことを意味します。近隣のジェントリフィケーションのプロセスを調べるとき、いかに近隣がより大きな地理的スケールに位置づけられているかを理解することが重要なのです。したがって、近隣で起こっていることを理解しようと拡大を試みながら、同時に近隣の場所で起こっていることを理解する必要もあります。

スラムの都市再開発を例にとってみましょう。スラムの再開発は、ジェントリフィケーション、すなわち、ほかに居住する場所を探す必要がある貧しい住民に大規模な立ち退きを引き起こすことが多いのです。そして次に住む場所は往々にして隣接する近隣街区となります。そこに多くの住む場所を追われた居住者が流れ込み、結果として彼ら彼女らは高密度化および手頃な価格の住居に対する高い需要を要因とした家賃の高騰に見舞われるのです。こうした事例は私が以前ソウルでおこなった近隣の調査で観察されました<sup>6)</sup>。その調査地では、6ヵ月から1年のあいだに、数千世帯が強制退去させられました。多くの人びと——この事例では、立ち退きにあった人のうち70%の人びと——は、代わりとなる住居を基本的に隣接する近隣街区に見つけています。これらの目的地である近隣街区は、手頃な価格の住宅ストックにたいする高い圧力に直面しました。それゆえ、貧しい人びとのあいだの住居にかかる賃料は増加したのです。このように隣接する近隣の高密度化は、貧しい家庭が立ち退きさせられたスラムの近隣で再開発が主導された(あるいは新築の)ジェントリフィケーションに関連していました。したがって、ある特定の近隣だけを注視するのではなく、同時進行する都市の変化を理解することが重要なのです。

同様に、いかにして複数のプロセス(そのうちの一つがジェントリフィケーションであるだけなのです)が機能するのかを理解することも重要です。特定の都市や近隣で作用する都市プロセスはほかにも存在します。おそらく重要なのは、ジェントリフィケーションのポジションがこのプロセスの中に存在すること、そしてジェントリフィケーションがそのほかの都市のプロセスといかに相互作用するのかを理解することです。これは、いかに展開する状況がジェントリフィケーションを支配的なものにするのか、そしていかにジェントリフィケーションが限界的であり続けるのかへの注意を必要とします。このようなダイナミクスが反映するのは、観察対象である都市という場所の空間性、そして埋め込まれた社

会政治的な関係性が状況として変わりつつあるという事態なのです。

ゆえにジェントリフィケーション研究者は、近隣街区に向けた自分たちの研究が、都市的不平等のより広範なプロセスに巻き込まれてしまうことを肝に命じなければなりません。ジェントリフィケーション研究では、多くの場合、近隣街区の周囲に境界を描くとともに、実質的に近隣を境界をもつ存在として描写してしまいます。とりわけこれは、ジェントリフィケーション研究が、立ち退きの規模を調べたり、その存在を検証するとき起こるものです。もちろん、どれくらいの人びとが立ち退きの対象となったのかを知る必要はあります。しかしながら、研究者は境界の描写を実践することの限界を知り、「居心地のよい場所」から抜け出して、彼らが探究する近隣からズームアウトすることが必要であると私は考えます。

最後に、現代世界のジェントリフィケーションが、いかに経済的、政治的、そしてイデオロギー的な国家のプロジェクトになるのかを考察することもきわめて重要です。多くの場合、ジェントリフィケーションの概念、特に貧しい人びとをのぞいた都市づくりや貧しい人びとを近隣から追い出すという考えは、多くの都市行政の主な政策目標となっています。一例をあげましょう。2011年に発表した計画において、東城区と呼ばれる北京内の市区の一つでは、人口規模を、20年以内に約90万人から約65万人に減少させると発表しました。この計画は、人口密度を減らし、より生産的な空間を解放すること、そして基本的に北京のインナーシティを世界都市としての外観に変えることを意図していました<sup>7)</sup>。ここでいう人口の減少とは、貧しい人びと、移民労働者、あるいはゴミ収集作業員や低価格の印刷業といったサービス業の最下層にいる人びとの追放を意味しています。そうした人びとすべてが、インナーシティ地区から郊外地域への追放に直面する運びとなったのです。なぜでしょうか。この都市が、高い技能をもった国内の熟練労働者と多国籍なグローバル・エリートをさらに引き入れしようとしていたからです。したがって、このような都市の変革は、あきらかな政策目標であって、実際に通常ジェントリフィケーションとして観察されることの延長なのです。それは事実上のジェントリフィケーションであり、たいいてい近隣街区の規模で議論されながら熱狂をあつめ、都市の規模へと拡大再生産されていくのです。こうした都市政策の転換や政策立案が反映するのは、もっと裕福な住民たちをもとめて特定のタイプの都市をつく

りだす、そんな都市のイデオロギー的なコミットメントです。

こうした政策決定は、事実上地方自治体の政治的行為であり、資本蓄積の政治経済的な目標を語るものです。ここにおいて中国政府は、それぞれの都市の賃料の格差をうまく利用して収益の創出を追求しています。ニール・スミスはジェントリフィケーションの経済決定論的な見方を生み出したと多くの人は考えています。しかし彼と彼の生み出した地代格差理論についての私の理解は、それと正反対です。スミスがある特定の場所の潜在的な地代と資本化された地代のあいだの賃料格差の拡大について議論していた1980年代初頭、特に1987年の刊行物において<sup>8)</sup>、ニール・スミスはすでにはっきりと述べています。すなわち、彼が地代上限の議論を通じて試みていたのは、ジェントリフィケーションが発生するとき、いかなることが実際に起こりうるのかを把握することであり、また、ジェントリフィケーションが必ずしも自律的に発生しうるとは述べようとしていないのです。

その点でニール・スミスは、まさに政治地理学者でした。スミスは賃料格差の実体的な可能性を現実にする政治的闘争の観察と分析の必要性、そしてこうした闘争の結果がジェントリフィケーションであることに言及していました。ニューヨークの敵対的な都市の状況について論じ、日本語にも翻訳されているスミスの『ジェントリフィケーションと報復都市——新たなる都市のフロンティア』(1996年)は、一つのよい例です。この本は、いかにして地代上限の搾取が不平等かつ社会的に不公正な都市政策によって生じるのかを政治地理学的に論じています。これらの場所の闘争に意味を与えて、より広く地域横断的な連携があらわれることを目的として、局地的に内在する立ち退きへの闘争を知らしめるために、都市生活の具体的な関係のなかでジェントリフィケーションについての理解を深めることが喫緊の課題なのです。

結論にまいりましょう。最近よく目にする問題の一つは、ジェントリフィケーションの意味や、ジェントリフィケーションへの言及、あるいは学術的にジェントリフィケーションが広く議論されていない場所でのジェントリフィケーションの概念がどのようなものであるのかというものです。たとえば、香港、中国、あるいは韓国では、学術的な概念としてのジェントリフィケーションは、ごく最近まで、非常に限定的に流通していました。1980年代から90年代にジェントリフィケーションを自身の研究で使用

していた韓国の都市研究者はごくわずかなものでした。ジェントリフィケーションが広く使用されるようになったのは、ここ数年のことです。こうした状況から、次のような問いが生まれるかもしれません。(a) 現在のジェントリフィケーションの普及はなにを意味するのか。(b) 概念としてのジェントリフィケーションが存在しない場所にジェントリフィケーションを適用することの学術的意義と政治的意義はどのようなものなのか。これらの問いについて、私が提示したいのは、二つの回答です。第一に、ジェントリフィケーションが、ある議論で言及されているのかどうかは重要なことではないということ——つまり、ジェントリフィケーションという語句の使用が好ましくない場合は、それを無理に使用する必要はありません。それは私がいつも述べていることです。もし地域的にジェントリフィケーションを理解するのが難しいように思われる場合は、使用する必要はありません。ほかに代わりとなる同様の表現があるかもしれません。そしてそれが実質的にはジェントリフィケーションであるプロセスを指し示しているのかもしれません。

第二に、特に不動産が不平等を生み出す重要な手段となるような場所では、都市プロセスの結合的な性質の強調を考えると、概念としてのジェントリフィケーションが存在しない場所にこの概念を採用し、より積極的に導入する利点もあります。このような都市のプロセスは、ローカルな資本主義に深く根ざしていると同時に、資本の国際的なネットワークの活動に影響を及ぼし、また影響を受けています。こうしたプロセスをプラネタリー・ジェントリフィケーションの一部と認識することによって、都市社会運動は、複数の地理的な規模で生じる都市開発の関連性をよく理解する機会となるのです。このようにして、ソウルや東京の都市生活者の経験が、それらの場所に特有のものではなく、ほかの場所で市民と共有されてきたものとして認識されうる方法を理解することができるのです。このように気づくことが、場所に特有の不平等と不公正に立ち向かう国際主義を成立させるための、ある部分での地域的連帯の基盤を形成するのに意義あるものとなるのでしよう。

ここで終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。

**原注**

- 1) Glass, R. (1964) Urban-rural differences in Southern Asia: Some aspects and methods of analysis. *UNESCO Research Centre on Social and Economic Development in Southern Asia*. See page 18.
- 2) *Ibid.*, p.1.
- 3) Massey, D. (1993) Question of Locality. *Geographical Association* 78(2): 142-149.
- 4) Merrifield, A. (2014) *The New Urban Question*. Pluto Press, London, p. 4.
- 5) 以下の論文を参照。Shin, H. B., Lees, L. And López-Morales, E. (2016) Introduction: Locating gentrification in the global east. *Urban Studies* 53(3): 455-470.
- 6) 以下の論文を参照。Shin, H. B. (2008) Living on the edge: Financing post-displacement housing in urban redevelopment projects in Seoul. *Environment and Urbanization* 20(2): 411-426.
- 7) より詳細には以下の論文を参照のこと。Shin, H. B. (2018) Studying global gentrifications. In: Harrison, J. and Hoyler, M. (eds.) *Doing Global Urban Research*. SAGE, pp. 138-152.
- 8) Smith, N. (1987) Gentrification and the rent gap. *Annals of the Association of American Geographers* 77(3): 462-465.

**訳注**

- 訳注1 本論はシン氏による報告原稿（英語）をシン氏自身による修正を経て翻訳したものである。本論の翻訳は、馬渡玲欧、林凌、渡邊隼（以上、東京大学・院）が下訳を担当し、荒又、仙波が取りまとめを行った。
- 訳注2 該当の表を訳出したものが以下である。

**表：伝統的なジェントリフィケーションの比較研究と関係比較論的アプローチの対比**  
 (Planetary Gentrification, p.14.)

**伝統的なジェントリフィケーションの比較研究**

- 境界づけられた都市
- 所与の都市
- 複数の都市における特異性
- 境界づけられた近隣
- 都市のスケールと直接的に結びついた近隣のスケール
- 理論の擁護・算出に用いられるための共通性と差異
- 一つのケーススタディのための理論化・概念化
- 確かな理論の構築

**ジェントリフィケーション研究における関係比較論的アプローチ**

- 境界のない都市
- 都市は他の都市との関係性(フローとネットワーク)をとおして構築される
- 都市の多数性・多様性および複数の中心性(新たな中心・周縁理論を含む)
- 他の都市との関係性から構成される近隣
- 間・規模的かつ政治化された近隣、都市、地域、グローバルのスケールリング
- 再理論化ならびに理論の検証・修正に用いられる共通性と差異
- 一つのケーススタディを超えた理論化・概念化
- より仮説的かつ発展的な理論の構築